

0-2. 研究背景

東京を近世都市・江戸から連続性を見出した建築史家がいる。陣内秀信である。陣内は『東京の空間人類学』において、「江戸・東京の都市の歴史を見通しながら考えようとした時、都市の空間構造、あるいは景観において、三つの重要な時期がある」ことを主張した。第一段階は地形が最大の条件となった江戸の町づくりで



図1 東京の空間人類学

である。第二段階は都市の基本的な骨格である町割りや各敷地の形状はほとんど変えることなく、ゆるやかに近代化が進められた明治の東京である。第三段階は東京の都市骨格、都市文脈そのものが近代的なものにつくり変えられていった大正後期・昭和前期である。つまり、現在の東京はこの三つの時期を通して連続していて、東京の千年村も同様に連続していると考えられる。東京の千年村の連続を手がかりに都市における千年村の解明に近づけることが本研究のねらいである。

0-3. 研究目的

第一章では、崖上と崖下の発生を確認することで崖の発生を明らかにする。第二章では、崖上の置換期として体制が変わったことで姿が変わった崖上が変わりながらも連続していることを明らかにする。第二章では、崖上の置換期として体制が変わったことで姿が変わった崖上が変わりながらも連続していることを明らかにする。

以上のように本研究では各段階において崖の存在が重要であると考えられる。まとめると、第一段階は崖が発生した。第二段階では崖上の置換、第三段階では崖下の転用が行われた時期なのである。本研究では陣内の説である三つの時期で豊島郡湯島郷の連続を明らかにしていくことで、崖が都市の連続を支える要因であることを明らかにすることを目的とする。

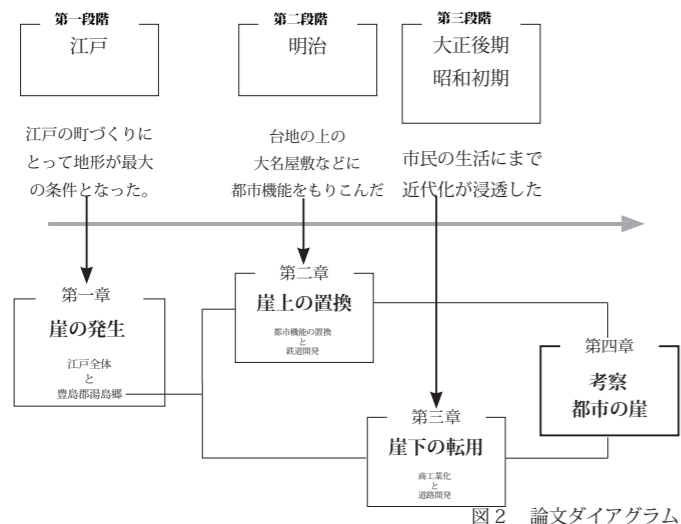


図2 論文ダイアグラム

0-6. 本研究の位置づけ

本研究の位置づけは陣内が見出した江戸と東京の連続性を、崖に注目し、豊島郡湯島郷を通して確認する。それにより都市を連続させる要因が崖であることを明らかにするものである。また、豊島郡湯島郷の連続を見ることで都市の千年村の評価方法の解明に近づけることを狙いとする。

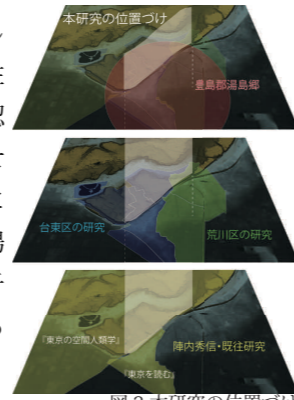


図3 本研究の位置づけ

第一章 崖の発生

第一章では、対象地である豊島郡湯島郷に焦点を当て、江戸期の様子を確認することで、崖上では階層の高い身分が土地を有していて、階層の低い身分が崖下を有していることも確認した。

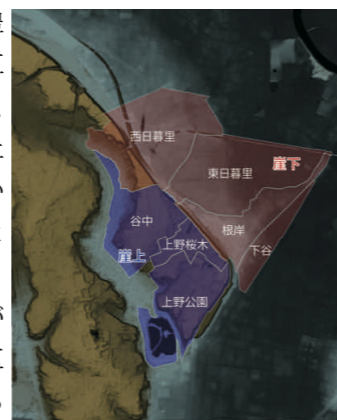


図4 1-2. 対象範囲

江戸期において崖上を崖下が発生したことにより2つを区分する崖が発生したこと明らかにした。



図5 江戸期の崖上



図6 江戸期の崖下

第二章 崖上の置換

2-4. 崖を沿う鉄道

豊島郡湯島郷で初めて開通した鉄道は、崖沿いに走る上野-熊谷間の東北本線である。崖を沿う東北本線は崖上と崖下を強調する形で敷かれた。これは崖が誘発して敷かれた鉄道であった。これによって崖上と崖下の分割はさらに強まっている。

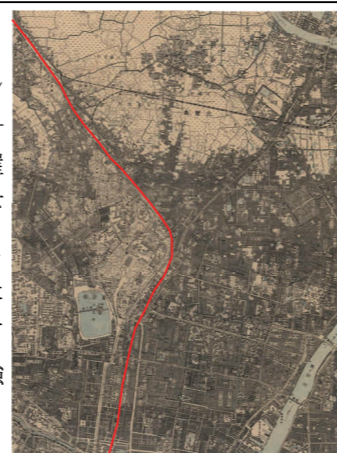


図7 明治末期の地図

崖上が広大で防災性に長けていた寛永寺であったため、明治になっても都市機能を受け入れる場所になった。その結果、近代国家の宗教空間としての寛永寺から近代国家の公共空間としての諸施設へと都市機能が置換された。

よって第二章では、都市機能の置換より崖上が連続していることを明らかにした。

第三章 崖下の転用

3-2. 水から陸へ

隅田川と南千住の両駅が荒川地域の都市化の引き金になった。両駅が設置された理由は以下の2つである。第一は、千住宿は関東地方の東半分から、東北地方全体にかけて地域と江戸を結ぶ重要な地点だった。そのため千住宿は繁盛を続けて、南の江戸の方に向かって膨張し、やがて千住大橋を越えて南千住にまで宿場町を形成させた。第二は、千住大橋の両岸は千住材木問屋を形成した港町だった。千住宿における南千住の役割は、この水陸の交通路を一つに結びつけるものであり、それはそのまま隅田川駅の機能に受け継がれたと言ってもよいものであった。



図8 水の発着から

図9 陸の発着へ

3-3. 集落から駅へ

荒川が洪水の度に運んできた土砂でつくられた自然堤防を、根城にした人々が、営々として水田を中心とする農村をつくり上げてきたこの地域が、王子電車で結ばれたのである。その農村が江戸-東京の発達につれて近郊農村となり、やがて現在みるように都市化してきたのであるが、その直接のきっかけになった電車の開通も、やはり自然堤防を利用した形のものであった。

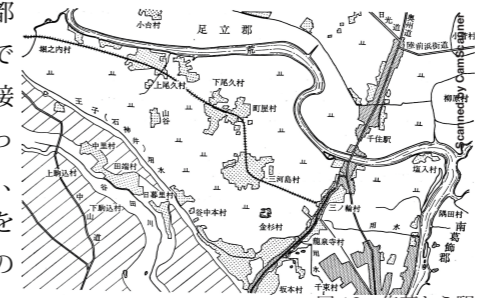


図10 集落から駅

3-5. 小結

崖下が微高地の集落と安価の農地であったため、都市化が進むに連れて集落は駅となり、農地は工場地となった。その結果、集中地点としての機能と生産場の転用がなされた。よって第二章では、機能・生産地の転用より崖下が連続していることを明らかにした。また、鉄道が都市化を促進させる要因であることも明らかにした。

第四章 考察 都市の崖

4-1. 都市の崖

第一章において明らかにした崖上と崖下の階層による土地利用は第二章、第三章をもって連続していることを明らかにした。このことより都市が形成されたことで崖上と崖下の階層による土地利用がなされた。崖上と崖下の使い分けによって、近代国家に変わってもそれぞれが連続している。都市によって崖が発生し、崖によって都市が連続している相互関係があると考えられる。

4-2. 都市の連続要素

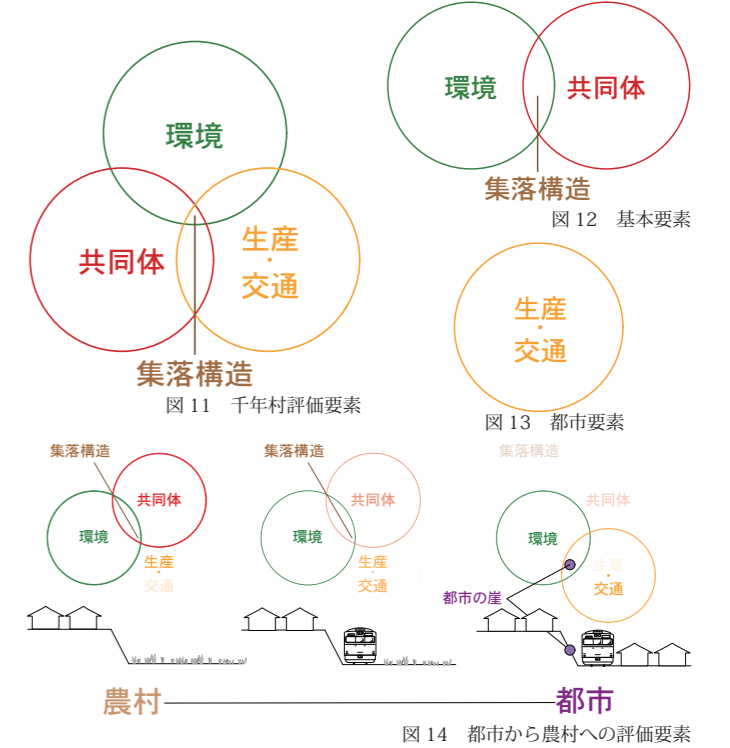


図11 千年村評価要素

図12 基本要素

図13 都市要素

図14 都市から農村への評価要素

図14の左のパートでは、環境・共同体と集落構造の「基本要素」のみを見ることで持続性を評価できる。中央のパートでは、都市に近づくに連れて交通の要素が強くなり共同体が見えづらくなる。「基本要素」に「都市要素」を含めて見ることで持続性を評価できる。右のパートでは、都市になると共同体が見えなくなり「基本要素」での持続性は見いだせない。しかし、環境と「都市要素」を見ることで連続性を評価できる。以上より、都市における評価要素は「環境と交通」であり、それらを見ることで連続性を評価できると考えられる。豊島郡湯島郷においては崖をもって連続性を明らかにした。

結論

考察から豊島郡湯島郷の連続を確認することで崖が都市の連続を支えるあるひとつの要因であることを明らかにした。

図1: Amazon.co.jp | (http://www.amazon.co.jp/?%E6%9D%B1%E4%BA%AC%E3%81%AE%E7%A9%BA%E9%96%93%E4%BA%BA%E9%A1%E5%AD%A6-%E3%81%A1%E3%81%8F%E3%81%BE%E5%AD%A6%E8%BA%B8%E6%96%B7%E5%BA%AB-%E9%99%A3%E5%86%85-%E7%A7%B0%E4%BF%A1/dp/4480080252 2015.11.19 閲覧)  
図2.11~14: 筆者作成 図3,4,7,8,9: 日本地図センター『東京時層地図』 段彩陰影図に筆者加筆 図5.6: 児玉幸多, 吉原 健一郎, 徳元昭, 中川恵司『復元江戸情報地図』(朝日新聞社 1994) に筆者加筆 図10: 『荒川区史 上巻』p1261 図11~13: 本研究のねらいであった都市の千年村の解明に近づけるために千年村プロジェクトの既存の評価要素をもとに都市の評価要素の検討をする。そのためにまず、現在の千年村プロジェクトの評価要素を示す。図11のように環境、共同体、生産・交通、それらを取り巻く集落構造の4要素で村落を評価している。本研究の第三章より、鉄道が都市化の要因であることが明らかである。そこで、既存の評価要素を(基本要素)と(都市要素)に分類して捉える。具体的には、環境、共同体それを取り巻く集落構造を(基本要素)として捉え、交通を含む生産・交通を都市要素として捉える。

## 目次構成

---

### 序論

- 0-1. はじめに
- 0-2. 研究背景
- 0-3. 研究目的
- 0-4. 研究方法
- 0-5. 既往研究
- 0-6. 本研究の位置づけ

### 本論

#### 第一章 崖の誕生

- 1-1. はじめに
- 1-2. 範囲
- 1-3. 自然地形の生成
- 1-4. 崖上の発生
- 1-5. 崖下の発生
- 1-6. 小結

#### 第二章 崖上の置換

- 2-1. はじめに
- 2-2. 公園の成立
- 2-3. 大学構想と博物館構想
- 2-4. 崖を沿う鉄道
- 2-5. 小結

#### 第三章 崖下の転職

- 3-1. はじめに
- 3-2. 水から陸へ
- 3-3. 集落から駅へ
- 3-4. 農地から工場地へ
- 3-5. 小結

#### 第四章 考察 都市の崖

- 4-1. 都市の崖
- 4-2. 都市の連続要素

### 結論

- あとがき
- 謝辞
- 参考文献
- 図版出典